

異言を語る者は、人にではなく、神に向かって語っています。誰も聞いていないのに、霊によって秘儀を語っているからです。しかし、預言する者は、人を造り上げ、勧めをなし、励ますために、人に向かって語っています。異言を語る者は自分を造り上げますが、預言する者は教会を造り上げます。（Iコリント14：2～4）

私は、あなたがたの誰よりも多くの異言が語れることを、神に感謝します。しかし、教会では、異言で一万の言葉を語るよりも、他の人たちを教えるために、理性によって、五つの言葉を語るほうを取ります。（Iコリント14：18～19）

パウロは、「愛を求めなさい。また、霊の賜物、特に預言するための賜物を熱心に求めなさい」と勧めている。異言と預言の違いを述べて、礼拝の秩序について書いている。今日の教会で「異言」を聞くことは少ない。私は、録音した異言を聞いたことがある。ワイワイ、ガヤガヤの声ばかりで、何を言っているのかは全く分からない。異言は、霊を受けて、人には分からないが、本人は恍惚状態で神を賛美しているらしい。初代教会においては、異言が尊ばれていた。パウロは、「異言」は霊によって、人ではなく神に向かって秘儀を語り、自分を造り上げると言う。だから、あなたがたが皆、異言を語ってほしいし、パウロは誰よりも多くの異言を語れることを、神に感謝していると、異言の意義を認めている。「預言」は、人を造り上げ、信仰を勧め、励ますために、人に向かって語り、教会を造り上げると言う。預言は、旧約聖書の預言ではなく、キリストの福音について、人が聞いて理解できる、理性的な言葉で語ることである。異言を語る者は、預言が教会を造り上げるように、解き明かすのでなければ、預言するの方が勝っている。

パウロがコリント教会に行って、異言を語ったとしても、啓示に基づく知識か教えによって、預言（宣教）しなければ、何の役にも立たない。笛や豎琴などの楽器でも、音に変化がなければ、何を吹き、何を弾いているのかが分からない。ラッパがはっきりした戦闘開始の音を出さなければ、誰が戦闘状態に入れるでしょうか。異言もはっきりした言葉で語らなければ、話していることが分からず、空に向かって語ることになる。世界には多くの言語があり、それぞれ皆意味を持っているが、その言語の意味が分からないなら、話し手と自分是对話できない外国人の関係になってしまう。同じように、霊の賜物を求めるなら、教会を造り上げるために、理解できる預言を豊かに受けるように求めなさい。

異言を語る者は、それを解き明かすできるように祈りなさい。異言の祈りは、霊で祈っているが、理性は働いていない。霊で祈り、ほめ歌を歌い、理性でも祈り、ほめ歌を歌おう。霊による異言で祝福しても、初心者には、何を言っているのか分からず「アーメン」と言うことができない。教会では一万の異言よりも、理性によって五つの言葉を語る方がよい。異言は信じていない者のため、預言は信じる者のためのしるしになる。

教会に集まって、皆が異言を語っているところに、信者でない初心者が入って来たら、あなた方のことを、気が変になっていると言うでしょう。しかし、皆が預言しているところに入って来たら、心の秘密の罪が暴かれ、ひれ伏して神を拝み、「まことに、神はあなたがたの内におられる」と告白し、神を信じる者になるでしょう。異言ではなく、言葉が通じる預言によって、神を恐れる信仰が伝わる。パウロは、礼拝においては、理性で受け止められる預言で語るように勧め、促している。